

当団体の活動はボランティアで担う文化交流部門と、学校での初期指導部門に分かれている。市の担当部署が異なるため、団体自身が行政部署間のつなぎの役割をしていると言える。

今回の研修では文化交流活動の一つである日本語サロン(毎月第1～3土曜に開催)の活動活性化により得られるだろう効果を目的とした。

日本語サロンは、地域住民と海外ルーツの親子が、遊びや特定のテーマを通して日本語に親しみ、学校や地域の情報交換をしたり、児童の補習学習の場としても機能している。

■実践課題と目的■

これまでサロンの支援者は成人の日本人ボランティアがほとんどだったが、実践内容を通して地域の子どもたちにも積極的に参加してもらい、他文化、自国文化に意識を向けて、相互理解を深める場を提供することを目指した。それが海外ルーツ児童の日本語習得のモチベーション向上と、双方のアイデンティティ形成の手助けとなることを期待したものである。

■実践内容■

・子どもサポーター活動(1月時点で親子7組15名参加)

11月初旬・・・市内全小学校に募集チラシ配布、市内掲示板でも掲示

11月～3月・・・各月第2土曜日を子どもサポーター活動日とする

活動内容:子ども向けやさしい日本語講座・・・日本人児童向けに用意

各国の遊び紹介と実践・・・各自、国の遊びを紹介し皆で遊んでみる

・日本語ワークショップ(参加者:計22名)

11月下旬・・・ミニアナウンサー講座、声優体験

活動内容:プロの方を講師とし、非言語コミュニケーションや非日常の日本語体験してもらい、日本語の面白さに触れる事を目的とする ※去年は海外ルーツの親子とボランティア+外部団体で開催

■実践を通じて、地域日本語教育コーディネーターとして果たした役割■

・団体の存在周知、活動内容の広報

・日本語への新たな気づき、身近にある他文化を意識する機会

・親同士の新しい交流の場を創出

→得られた成果

- ・問い合わせ、見学希望の件数が増(3ヶ月～半年に1件→月3件以上)
- ・参加者からは楽しかった、また来たいとの声
- ・改善点の発見

→達成できなかったことと反省点

- ・やさしい日本語講座・・・子どもグループを分けてしまったことで活動にまとまりがなくなり、中途半端に終わった。
- ・他のメンバーとのコミュニケーション不足
- ・子どもサポーターの継続性・・・次回も来たいとの声はあったが、実際は単発で終わっている。イベント性が強かったのも原因。これからもこまめに情報発信し、参加を促す。

■実践を通して「行ったこと」「考えたこと」■

- ・秋季研修で、日本人と海外ルーツの子どもを区別する必要はないとの意見をいただき、自分の中で不要な仕切りを作っていたかもしれないことに気づいた。
- ・子どもたちは遊びに必要な言葉を自身で取捨選択しているということ。先回りしない支援のあり方や、言葉から活動ではなく、活動から言葉につなげる活動手法。
- ・他のメンバーとの情報共有、認識の一致が、思ったよりできていなかった。メンバー内でのコミュニケーションの重要性を再認識。
- ・国際交流に興味のある住民と団体活動をコミットさせていくために、団体をもっとオープンにしていく。
- ・適切などころへ適切な方法で広報できたときの効果の高さを実感。

■地域日本語教育コーディネーターとして自身が大切にしたい視点■

- ・自分の行動が自己満足的、独善的になっていないか常にモニターする
- ・丁寧な説明、コミュニケーションを心がけること
- ・成果を焦らないこと
- ・多文化共生とは何かを問い続けること

■実践において、難しいと感じたこと、今後に向け知りたいこと■

ボランティアの方には余計な負担をかけず楽しく活動してほしいとの配慮が、連携不足の一因になってしまったと感じる。どう話し合いの時間を捻出するか、運営にどれだけ関わってもらうかの調整が難しい。同時に人材育成の必要性を強く感じた。

今回実践課題とした事は、短期間での評価が難しいものだった。しかし運営について多く改善点が明らかになったことは成果の一つと考える。